

# 「雪国に生きて」ファイナル展

尾身ミノさんの石(意思 仏「語らいの家」閉館



個人で民俗館を思い立った尾身ミノさん

失われ行く明治大正昭和の雪国の庶民の暮らしを支えてきた生活や仕事道具・文集などを保存公開してきた市内鉢の「石仏語り家」が、11月3日〜7日開かれる「雪国に生きて・語らいの家ファイナル」展を最後に幕を閉じる。入場無料。

木挽き職人の家に嫁ぎ、夫を事故で早くに亡くし、その後真田小学校の給食員をしながら女手一つで子どもを育て、雪深い鉢で暮らしてきた尾身ミノさん(91)が、コツコツと集めた明治大正昭和の集落の生活道具や木挽き道具などを「明治大正昭和の館」として家を開放しようとした矢

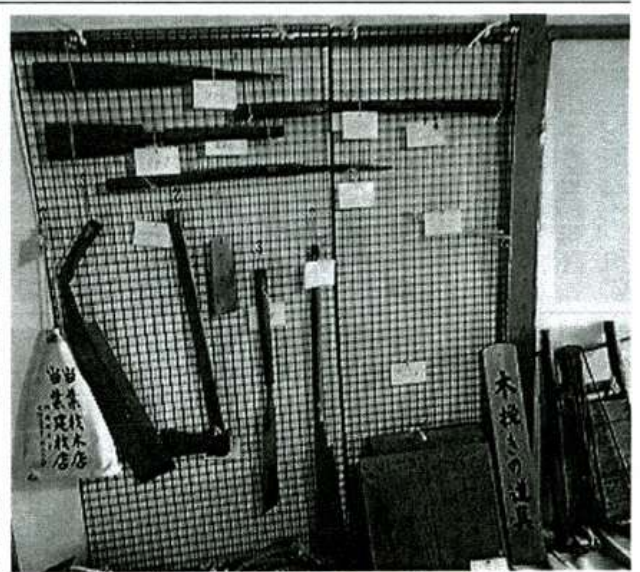
先、中越地震で被災、翌2005年、脳出血で倒れ半身不随となった。その志を引き継いだのが、ミノさんの探究心と明るい人柄に魅せられた中川成夫教授の立教大学

学芸員課程の学生達OB O.G。学生等は1976年、市博物館オープン間近に十日町市内の民俗調査で鉢を訪れてミノさん宅に民泊、卒業後も長きにわたり交流を温め、収集した民俗資料や生活道具などの整理分類を進め、2009年、ミノさんが夢だったミノさんの家を雪国山里の生活民俗資料館「石仏語りの家」としてオープンさせた。

ウェブ上で「語らいの家」の活動や尾身ミノさんが収集した民俗資料、生活用具などを展示する。台所道具は、コネバチ、シルジャッペ、スイノウ、火付けに使うツケギ。嫁ぎ先の家業だった木挽き道具のナタ、メエビキ、トビケチ、カケヤなど。さらにはイネコキ、タノクサトリ、ソリ、コエカゴなどの農具。藍染めの仕事着ヤマギやモモヒキ、メエアテ。さらには刺し子頭巾、マント、出稼ぎ用トランクなど昭和までの時代ごとの家にもあったもので今や失われた道具や品々。

また昭和38年からのガリ版刷り婦人学級だよりや昭和24年当時の青年団制作のガリ版刷り雑誌「友愛」、敗戦後の復興に日本立て直しの熱気に溢れた文芸誌も残されていた。SPレコードや書籍などミノさんの几帳面な証しが歴史をまとい今に残されている。

語らいの家はファイナルにあたり「今から95年前に始まった昭和という時代は、日本の暮らしを丸ごと変える激動の時代だった。雪国十日町で助け合いながら冬を過ごし春を待ちわびた里山の品々は遠い記憶になろうとしている。この家に暮



木挽き職人だった夫の残した道具



「語らいの家」と2009年オープンの記念写真看板を持つ尾身さん